2024年7月28日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

小さな死を生きる

［創世記28章10～22節］

ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」 そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

[1] 『生きてることが辛いなら』

 『さくら』という歌が特によく知られているシンガーソングライターの森山直太朗の歌で 『生きてることが辛いなら』という題の歌があります（歌詞は彼の友人で詩人の御徒町凧（かいと）さん。因みに『さくら』の詞は、森山氏との合作）。

―「生きてることが辛いなら、いっそ小さく死ねばいい。…生きてることが辛いなら、わめき散らして泣けばいい。その内 夜は明けちゃって、疲れて眠りに就くだろう。夜に泣くのは赤ん坊 だけって決まりはないんだし。…生きてることが辛いなら、嫌になるまで生きるがいい」。

「生きてることが辛いなら、いっそ小さく死ねばいい」という言葉だけ聞くと、何か自殺することを勧めているように聞こえてしまって、ちょっとギョッとしてしまう人も多いということも聞くのですが、真意は逆で、むしろ生きること・生きて行くことを励ましている歌だと言えると思います。私はこの「小さく死ぬ」っていう言葉はとてもいいなぁ、と思うのです。イエス様もおっしゃったじゃないですか。「この日の苦労は、この日だけで充分である。…明日のことまで思い悩むな」（マタイ6:34）というように。

[2] 天の階段（天のはしご）

　今月から創世記のヤコブの物語（正しくはヤコブの家族の物語）を見ていますが、今日の28章は、ヤコブにとって決定的な出来事になった、神様との出会いの物語が記されています。新共同訳聖書では「天まで達する階段」（12節）と表現されていますが、他にも「天の梯子」とか「ヤコブの梯子」とかいうように言われたりします。「ヤコブのはしご」というのは、気象用語にもなり、夕方などにみられる、雲間を突き抜けて地上に一直線に向かう帯状の太陽光線のことをそのように言いますね（「レンブラント光線」なんていう言い方もされますが）。28章10節以下をもう一度見てみましょう。―「ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。」

 その後、主の言葉があって、主はヤコブに、この土地をあなたとあなたの子孫に与えるという祝福の約束を語り、さらにヤコブ個人をこのように力づけるのです。28章15節です。「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」 ―夢の中の言葉と言っても、それはリアルなものでした。その言葉にヤコブはどれだけ勇気を与えられたことだろうか！と思います。そして、これは私たちへの言葉としても聞くことが出来ると思うのです。

　この時のヤコブのことを想像してみたいと思います。ヤコブ。先週見たとおり、双子の兄エサウの恨みを買ってしまったヤコブです。背後には母親リベカの入れ知恵もあったのですが、目が弱くなった父イサクを騙す形で、本来なら長子が受け継ぐべき祝福を、横取りしてしまったのです。そのことに後から気付いた長男エサウはイサクに「わたしにも祝福を下さい」と懇願しますが、「今やわたしにはどうすることも出来ない」と言われてしまい、エサウは泣きます。そして、双子の弟ヤコブに敵意を抱くのです。それを知った母リベカはヤコブにこう言うのです。27:43です。「わたしの子よ。今、わたしの言うことをよく聞き、急いでハランに、わたしの兄ラバンの所へ逃げて行きなさい。そして、お兄さんの怒りが治まるまで、しばらく伯父さんの所に置いてもらいなさい。」

　ラバンが住むハランは、べエル・シェバから旅するにはにわかには信じられないほど遠い所です。700キロ以上離れています。よく辿り着いたなあと思います。何日も真っ暗な荒野の夜を過ごした筈です。渇いて死んでしまうことや、獣に襲われる危険もあったでしょう。大体リベカは、伯父ラバンに連絡など出来たのでしょうか？多分初めての独り旅の中でヤコブは何を思ったことでしょう。聖書は書いていませんが恐怖もあったでしょう。しかしそれよりも、「ああ、こうなったのは俺のせいだ」という後悔や、自責の念に捉えられたりしたに違いないと私は思います。「身から出た錆」ではありませんが、今孤独に陥り、「もう死んでしまいたい」と思ったこともきっとあったと思います。

[3] あるがままのあなたで 「生きよ！」

私は最近ドキュメンタリー映画で『生きて、生きて、生きろ』という映画を観ましたが、それは、あの東日本大震災が契機になって、自分の若い息子を自死で失ってしまい、そのことで自分が許せない自責の念がいつもまとわりついている父親（アルコール依存症にもなっていた）を、自宅に訪問し続け見守る、福島の男性看護師の姿などが描かれている映画でした。そしてその父親は言うのです。「俺は、半分生きていて、半分死んでいる」と。しかし、何年か経過する中で次第に変わってくるのですね。ある時その父親は看護師に言うのです。「何で、ここにいるの？何で？」と。そして看護師は言うのです。「あなたに会いに来るためです」。もう一度「何で？」。「あなたに会いに来るため。それじゃだめですか？」というやりとりが映画で描かれていて、私はそれにとても心打たれました。

　この映画のタイトルは『生きて、生きて、生きろ』です。私たちは時に、死の力に脅かされる時があるかも知れないと思います。いえ、自分でも知らない内に、生きるよりも死ぬ方が楽なように思える時があると思います。この映画の中の看護師や、また精神科医も出て来るのですが、その人たちは、様々な自責の念を抱え、生きることがつらくなり、死がすぐ隣りにあるような人々に対して、叱咤激励したり、或は「頑張らなきゃ」ということは言いません。そうではなくて「あなたに会いに来たんです」とか、「生きているだけですばらしいよ」と声をかける。私は、何かここに、今日の聖書箇所と重なるものを感じたのです。

ヤコブが石を枕にして眠っている時に見た光景はこうです。「先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。」　私たちはここで「階段が地に向かって伸びており」という言葉に驚いて良いと思います。この階段或いは梯子は、「上から」来ているのです！しかも「先端が天に達して」いるのです。あのバベルの塔（創世記11章）は、人間が一所懸命に建てた塔でしたけれども、天にまで達することはなかった訳です。人間は、神の領域に入ることは出来ません。しかし、神様は、自由に私たちの現実の中に現臨されるのですね。天と地、神と人間を繋ぐ階段・梯子を、神様は孤独な罪人目掛けて架けて下さったのです。何のため？私たちに会うためではないでしょうか？そして、本当に私たちに出会うために降りて来て下さったお方がいます。主イエス・キリストです。私たちを探し出し、照らし、生かすために。そして、時に、死にたいと思う私たちに約束して下さるのです。―「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

ヤコブがここで経験したことは、自分が大いなる方に赦されているということ、そして、孤独にはしないという、神様からの一方的な憐みだと思います。

　神様は、「自業自得、自己責任だ」、「まず努力せよ、そうすれば助ける」とは仰いません。そんなカルトみたいな神様だったら信仰持たない方が良いです。不自由になるだけです。そうではなく、私たちが信じている神様は、十字架と復活の主です。天と地の一切の権能をお持ちの方が、私たちの所まで身を低くして来て下さって、私たちを愛し、私たちのために「大きな死」を身代わって経験し、そして甦って下さった方です。（ヨハネ1:51参照）。このお方にお委ねする時、私たちは、本当に死んでしまうのではなくて、森山直太朗の歌ではないですが、毎日「いっそ小さく死ぬ」ことが出来るのではないでしょうか？この私の一番の問題は、もう主によって解決されているのだから、このあるがままの私の姿で生きることをこそ主は望んでおられるのだと自分の人生を新しく受け止めることが出来るのではないでしょうか？ヤコブがそうであったように、私たちも、私たち固有の罪や過ちをも含めた「私」として、しかしまた、神様の赦しの光に包まれ、日ごとに聖霊によって変えて頂くことを祈りながら人生の旅を歩んで行きたいと思うのです。

 「生きてることが辛いなら、わめき散らして泣けばいい。…夜に泣くのは赤ん坊 だけって決まりはないんだし。…生きてることが辛いなら、嫌になるまで生きるがいい」。

お祈り致します。

　神様、御言葉を感謝します。ヤコブは自分では神様などおられないと思う所で神様の臨在に触れました。私たちに対しても、あなたは思いがけない形で私たちに出会い続けて下さるお方であることを信じます。どうか、いつも頑なで自分自身を明け渡すことが出来ない者ですが、すでに私たちがイエス様の命の中に生かされていることを信じ、今日の自分に死んで、あなたの愛の導きの中にお委ねして行くしなやかな心をお与え下さい。主イエスの御名によって。アーメン。